様式４　　〈推進校 → 一宮市社協〉

2025年度　一宮市社会福祉推進校実践活動報告書

学　校　名	一宮市立宮西小学校	学校Ｎｏ．	1

１．福祉教育の取り組み（目標・計画・推進体制）

（１）目標
- 福祉読本「ともに生きる」やなどを活用して情報を集め、福祉への関心を高めるとともに、一人ひとりの違いを認め合う「多様性」について理解を深める。
- 福祉実践教室などの体験を通して学んだことや考えたことを、国語科の学習とつなげて報告書にまとめる。
- 活動を振り返る中で、これからの社会のあり方や、自分自身の生き方に生かそうとする態度を育てる。

（２）活動計画
- 多様な資料を使って福祉について調べ、自分たちの暮らしとの関わりを見つめ直すことで、課題意識をもてるようにする。
- 福祉実践教室での体験活動を通して、自分にできることは何かを具体的に考える。
- 国語科の「みんなが過ごしやすい町へ」の学習として、自分の考えを深めたり共有したりする。

（３）推進体制
- 5年生の総合的な学習の時間と国語科の学習を関連させ、学年全体で共通のねらいを持って計画・実践に取り組んだ。

２．福祉教育の具体的活動の内容（活動の記録）

①福祉読本「ともに生きる」やインターネット、図書資料を有効に活用し、福祉に対する理解を深めること　ができた。特に、福祉実践教室で実際に体験する「視覚障がい者ガイドヘルプ」「手話」「車いす」のについては、事前に重点的な調べ学習を行った。
②福祉実践教室での体験を通して、自分にできることを考えた。１１月１７日に行った福祉実践教室では、「視覚障がい者ガイドヘルプ」「手話」「車いす」の３つの講座に分かれて体験学習を行った。実際に体験することで、資料だけでは分からなかったたくさんことに気づくことができ、福祉について自分にできることを考えるきっかけとすることができた。

11月17日(月)福祉実践教室　5年生

３．福祉教育の成果と今後の課題

福祉実践教室を含めた総合的な学習の時間を中心に、国語科「みんなが過ごしやすい町へ」の報告書として活動をまとめ、振り返りを行うことができた。子どもたちは事前の調べ学習の段階では「福祉」について漠然としたイメージしかもっていなかったが、福祉実践教室での体験学習を通して共生の大切さとともに、「自分たちも何かしたい」という意識を高めることができた。また、キャリア教育講演会の講師として講演をいただいたブラインドラグビーの日本代表のキャプテン原聡さんのお話聞く中で、「自分も夢に向かって努力したい」など、自分の将来について考えるきっかけとすることができた。

1月8日(木)　キャリア教育講演会より

本日、宮西小学校にて5・6年生を対象とした講演会を開催しました。講師にお招きしたのは、**一宮市出身でブラインドラグビー日本代表キャプテンの原聡さん**です。学生時代はハンドボール選手として活躍され、現在は神奈川県を拠点に活動されています。来年2026年2月には、ミラノ・コルティナ冬季パラリンピックの開会式に選ばれるそうです。

また耳慣れない「ブラインドラグビー」についても教えていただきました。2015年にイギリスで誕生したこの競技は、7人制でタックルがなく、鈴のついたボールを使用するのが特徴です。視覚障がいのない「晴眼者」の口ミュニケーションで戦術を組み立てる、広地十各10分のハードなスポーツです。

原さんは社会人までハンドボールを続けていましたが、後輩選手の視力低下を目撃し、一緒に楽しめるスポーツを作りたいと考えたのがきっかけとなり、ブラインドラグビーとの出会いを通して夢に向かう力を取り戻したとのことです。

講演の中で、原さんが特に伝えたいのは「No challenge, no success（挑戦なくして、成功なし）」という言葉でした。「世界一」という夢に向かって努力を惜しまない原さん。日本代表の皆さんが世界一を掲げ戦うあなたから応援しています。

※上記内容を含むものであれば、本報告書の様式は問いません。

※当会ウェブサイトに掲載させていただきます。また、可能な限り各校でウェブサイト等に掲載してください。

様式4　　〈推進校 → 一宮市社協〉

2025年度 一宮市社会福祉推進校実践活動報告書

学校名	一宮市立貴船小学校	学校No.	2

1　福祉教育の取り組み（目標・計画・推進体制）

- 目　　標　高齢者や障害のある人たちにとって，住みよい社会とはどんな社会なのかを体験活動を通して考え，自分たちができることを調査・追究することができる
- 計　　画　【2学期】福祉実践教室・赤い羽根共同募金　【3学期】学習発表会への参加
- 推進体制　福祉・環境教育部会を組織し，各学年と調整して計画を具体的に推進する。
  児童会の運営委員会が中心となって募金活動などを計画し推進する。

2　福祉教育の具体的活動の内容（活動の記録）

- 福祉実践教室

事前に各学級でテキストの「思い出してごらん」を使用し，障害がある人にとって，日常生活の中で困ることは何か話し合い，福祉について学習を行った。福祉実践教室が行われ，はじめに講義を聞き，視覚障害について学習した。その後，「車いす」「手話」「ガイドヘルプ」の3つのコースに分かれ，約1時間の各体験活動を行った。車いす体験では，車いすの基本的な操作方法を学び，マットで作った段差を乗り越える体験をした。手話体験では，あいさつや指文字など，身近に使える手話を友だち同士で伝え合う体験をし，筆談や空書など，目が不自由な人の会話の仕方があることを学んだ。ガイドヘルプ体験では，2人1組になって，アイマスクをした状態での階段の上り下りや，障害物のある道の通行を体験した。どの体験でも，児童たちは，障害をもった方々の苦労や工夫を理解することができた。実際に体験してみて，大変さを理解すると同時に，誰もが住みやすい社会を作っていくために自分たちに何ができるのかを考えるきっかけとなった。

- 学習発表会

福祉実践教室で学んだことをさらに深めるために，総合学習で「誰もが住みやすい街づくり」にはどのようなことが必要か，グループで調べたり，話し合ったりして学習を進めた。実生活の中で，視覚障害の方の不安や危険なことに気づき，より安全に過ごすためにはどうしたらよいかについて考えたグループは，超音波を利用して道案内をしてくれる方法を考えた。また，この方法は視覚障害の方だけでなく，誰にとっても安全に街を歩くことができる方法であることに気づいた。また，AIを搭載した白杖の存在を知ったグループは，過ごしやすく改善されている一方で，それでも知らない人に「助けてほしい」ときはどうするのか，という疑問をもった。実際に声をかけようとしたが，「逆に迷惑になってしまうのではないか」という不安になり，声をかけられなかった経験があったと話した。そこで，小学校や中学校で障害のある方ともっと交流する機会を増やすとよいと考えた。子どものうちから障害のある人たちへの理解を深めることで，大人になってもその人たちの気持ちが分かり，すぐに助けにいくことができると考えた。これは障害がある人に限らず，困っている人なら誰でも助かることに気づいた。この学習を通して，障害のある人にとって住みやすい街は，誰にとっても安全で心地よく生活できる街であると気づいた。各班で調べたり，考えたりしたことを発表し，保護者にも聞いていただいた。

3　福祉教育の成果と今後の課題

- 5年生では，総合的な学習の時間に「福祉」をテーマに学習に取り組んだ。テキストを読むだけではなく，講義を聞いたり，実際に体験したりすることで，これから自分たちは何ができるのか，どのような社会を作っていくべきなのかを考えることができた。
- 総合的な学習の時間の時数が減少し，5年生でも「福祉」についての学習時間が減少した。時間と情報を有効に活用し，福祉についてより深く理解していけるよう今後も見つめる心と実践力を身につけさせていきたい。

様式4　　〈推進校→一宮市社協〉

令和7年度　一宮市社会福祉推進校実践活動報告書

学　校　名	一宮市立神山小学校	学校NO.	3

1. 福祉教育の取り組み（目標・計画・推進体制）

（1）目　標

福祉に関する実践学習の機会を提供し、社会福祉への理解と関心を高め、ボランティア、社会連帯の精神を養うとともに、地域社会への連帯を深めることを目的とする。

（2）計　画

・奉仕活動への参加　・赤十字活動への参加　・各種募金活動　・あいさつ運動
・福祉実践教室　・あったか家族週間

（3）推進体制

該当する学年または委員会組織で計画的・具体的に推進する。

【福祉実践教室の様子】

2. 福祉教育の具体的活動の内容（活動の記録）

（1）体験活動

①校内清掃活動

1学期には月に1回「草取りの日」を設定し、全校児童が参加した。活動によって校内の美化体験をすることができた。

（2）実践活動

①福祉実践教室

5年生が視覚障害者ガイドヘルプ・手話・点字・車椅子等の活動を通し、体の不自由な方への理解を深めることができた。児童からは、「みんなが幸せに暮らせる社会にしたい」「障害のある人や介護の必要な人の苦労や悩みをわかる人になりたい」といった声が聞かれた。

【あいさつ運動の様子】

②卒業式に向けた花の栽培活動

1年生から5年生の児童で、卒業式の会場に飾る花を育てる活動に取り組んだ。お世話になった6年生への感謝の思いを形にしようと、水やりや草取りを丁寧に行う姿がみられ、奉仕の精神を育てることができた。

（3）活動の広がり

代表委員会と生活委員会の児童が中心となって活動しあいさつ運動を実施し、地域のあいさつの活性化につなげることができた。いつでもだれにでもあいさつできるために運動を継続している。

また、中部中学校区で連携して「あったか家族週間」の運動を実施した。家族とふれあう時間を見直し、家族の一員としての自覚や役割を育てることができた。

【あったか家族週間のチラシ】

3. 福祉教育の成果と今後の課題

今年度の取り組みにより、多くの児童の福祉に対する意識を高めることができた。また、進んであいさつ運動や栽培活動に参加する中で、他者への思いやりの気持ちが高められた。実践力のさらなる向上を目指し、継続的に活動を進めたい。

様式４

＜推進校　➡　一宮市社協　＞

2025 年度　一宮市社会福祉推進校実践活動報告書

学校名	一宮市立大志小学校	学校No.	4

1　福祉教育の取組（目標・計画・推進体制）

【目標】「共に生きる」社会の一員として、身近な社会課題に関心を持ち、自分たちにできることを考えて実践する態度を育む。相手の立場を理解する想像力と、自ら行動する主体性を養う。

【計画・推進体制】児童会活動および学年単位の体験学習を柱として、全校的な推進体制を整える。

児童会：募金活動の企画・運営、ペットボトルキャップ回収、あいさつ運動の推進。

各学年：発達段階に応じた福祉体験学習の実施（本年度は４年生が中心）。

地域連携：外部講師を招いた専門的な実習の実施。

2　福祉教育の具体的活動の内容（活動の記録）

①　児童会による社会貢献活動

・赤い羽根共同募金：児童会が中心となってポスター等で協力を呼びかけ、朝の登校時間に昇降口にて募金活動を実施した。

・ペットボトルキャップ回収：通年で全校児童に呼びかけ回収を実施。集まったキャップは協力団体を通じて、世界の子供たちのワクチン支援や福祉活動に役立てられている。

・あいさつ運動：児童会役員が中心となり、明るい地域・学校づくりの第一歩として、相手を思いやる挨拶の輪を広げている。

②　福祉実践教室（４年生）

・講師を招き、専門的な知識と技術を学ぶ体験型学習を実施した。

・車いす体験：自力での操作に加え、段差やスロープでの介助方法を学習。

・ガイドヘルプ体験：視覚に障がいがある方への声掛けや、安全な誘導の仕方をペアで実習。

3. 福祉教育の成果と今後の課題

【成果】

①当事者意識の向上：福祉実践教室を通じて、「障がい」を自分たちの身近なこととして捉え、街中で困っている人を見かけた際に「何か手伝えることはありますか」と声をかける意識が芽生えた。

②主体性の育ち：児童会が自ら提案・準備した募金活動により、目的意識を持って社会貢献に取り組む姿勢が見られた。

③日常的な福祉：キャップ回収や挨拶という日々の小さな活動の積み重ねが、誰かの役に立っているという実感を児童に与えることができた。

【今後の課題】

①活動の継続と定着：体験学習を一過性のイベントに終わらせず、次年度以降も継続的に実施し、低学年から高学年まで一貫した福祉意識を醸成していく必要がある。

②学びの深化：活動後の振り返り時間をより充実させ、「なぜこの活動が必要なのか」という本質的な理解をさらに深める工夫を検討したい。

様式４　　〈推進校 → 一宮市社協〉

2025年度　一宮市社会福祉推進校実践活動報告書

学　校　名	一宮市立向山小学校	学校Ｎｏ．	5

１．福祉教育の取り組み（目標・計画・推進体制）

（１）目標

①会福祉体験を通して障がいのある人たちの暮らしの実際に気づかせ、思いやりの心を育てる。

②地域福祉を推進するため、一人ひとりがそれぞれの立場、可能な方法で社会に貢献しようとする気持ちを育てる。

（２）計画

①福祉に関する調べ学習（５月～1月）福祉実践教室（６月）

②募金活動（１１月）

（３）推進体制

①５年生の総合的な学習として取り組み、学年全体で計画・実践する。

②児童会を中心に活動を呼びかけ、社会に役立とうとする姿勢を育てる。

２．福祉教育の具体的活動の内容（活動の記録）

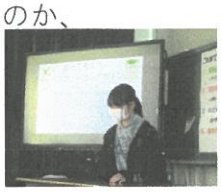
（１）福祉実践教室

６月４日、４つのグループに分かれて福祉実践教室を行った。「車いす体験」では、扱い方や介助の仕方を学ぶとともに、足の不自由な方が何に困っているのかを体験を通して知ることができた。「手話体験」では、簡単な手話で会話する体験を行い、自分の手話が通じる喜びから関心を高めるとともに、多様な伝達方法があることを学んだ。「点字体験」では、実際に点字を打つ・読む体験を通じ、その困難さや目の不自由な方の苦労、町の不便さに気づくことができた。「高齢者疑似体験」では、装具を装着しての歩行等により日常の不便さを理解し、身近にサポートを必要としている人がいることを知るきっかけとなった。

これらの体験を通して、障害を持つ方の苦労や、自分にできる支援について考える大切な学びとなった。

（２）福祉実践教室の事後学習

福祉実践教室での学びを深めるため、身近なユニバーサルデザイン（UD）についての事後調査を行った。学校生活の中にどのような「バリア」や「支援」があるのか、改めて調べ学習を実施した。具体的には、「もし自分や友達が障害をもっていたら、どんな場面で困るのか」を、教わった知識をもとにシミュレーションし、現状を確かめた。



これらの学びを活かして、自分たちにできることを話し合い、誰もがより使いやすくなるような「オリジナルUD」を考えた。学習発表会では、その成果を他学年の児童や保護者、地域の方々へ向けて発信した。

（２）募金活動

児童会の企画で、11月に「赤い羽根募金」を行った。集まった募金は、自分たちの住む町や、災害時に困っている人を助けるために使われることを児童集会で知らせた。支援を必要とする人々の力になれるよう積極的に呼びかけを行い、進んで募金活動に取り組んだ。

３．福祉教育の成果と今後の課題

5年生は、1年間を通して福祉についての学びを深めてきた。福祉実践教室を大きな出発点として学びを広げ、事後学習を通していくことで、福祉をより身近なものとして捉え直すことができた。特に、学習発表会で多くの方々に発信した経験は、UDの本質について深く考える貴重な機会となった。

児童は自分なりに探究を深める中で、「UDは障害のあるなしに関係なく、すべての人に役立つものである」という大切な視点を持つに至った。

今後も、それぞれの活動の意義を児童と共有しながら、事前・事後学習のサイクルを充実させ、福祉への理解をより一層深めていきたい。

※上記内容を含むものであれば、本報告書の様式は問いません。

※当会ウェブサイトに掲載させていただきます。また、可能な限り各校でウェブサイト等に掲載してください。